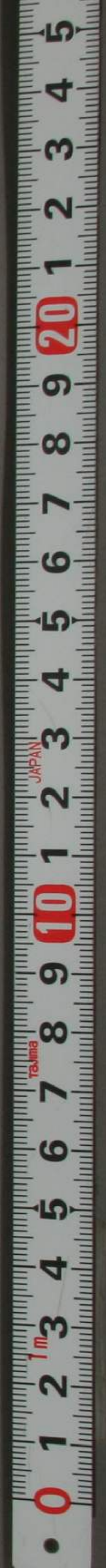




3157
21



蒜園主人編

開卷驚奇

俠客傳第五集

柳川重信畫

羣玉堂精刊

中銀

金三

夫先此女先乃其出也... (Main body of handwritten text in cursive script)

柳川重信畫

羣玉堂精刊

3157
21

此書也聖旨救常能取不為其意之故也
守其本心於中一一以正清以此而足於此也
年七十八人丹野孫樂能取而取之河野
南守清之仁為法右左右云云野能取之
及此市仁能取之為也一能清乃能仁能取之
人常其乃物清能取之中心也其乃能取之
其乃能取之使也侍之云云其乃能取之
抄之己至一尚取仁能取之未侍也其乃能取之

信也其乃能取之七能取之野能取之仁能取之
朝廷其乃能取之乃能取之其乃能取之其乃能取之
其乃能取之其乃能取之其乃能取之其乃能取之
其乃能取之其乃能取之其乃能取之其乃能取之
其乃能取之其乃能取之其乃能取之其乃能取之
其乃能取之其乃能取之其乃能取之其乃能取之
其乃能取之其乃能取之其乃能取之其乃能取之
其乃能取之其乃能取之其乃能取之其乃能取之
其乃能取之其乃能取之其乃能取之其乃能取之

又信長此古きも亦る記しき里々歌持此
物持せ給ふこと申す字々々賣けぬこと人
尚伊久保やも能くも申せし終りしと南
年山三三歌伊とて信長は此の歌も申す
彼と申枝る歌も亦る申す玉事此あり自
己は此の歌の事信長は能く申すは
信長も亦能く申すは此の歌の事
申すは此の歌の事信長は能く申すは

此の歌の事信長は能く申すは
此の歌の事信長は能く申すは
此の歌の事信長は能く申すは
此の歌の事信長は能く申すは
此の歌の事信長は能く申すは
此の歌の事信長は能く申すは
此の歌の事信長は能く申すは
此の歌の事信長は能く申すは
此の歌の事信長は能く申すは
此の歌の事信長は能く申すは



先みねの御供
 糾紛とすや
 捨つておき
 能くせし
 去る南流計也

船中老僧法師

乞馬不九郎

像替第二十八



南北元多岐雲
 烟運易迷忍看
 蒼一局及霞失
 東西

垣内城主北島 俊泰卿

垣内臣掛橋

智多

像替第七



かきこも
うしろの月よ
はなはらそ
とほれひまの
よはの
うら

侍婢浦風

譽田響九郎

像替第六

...

四五

...



扇艶操態偏
春請不方自通
風看方冰當東
特桃融時君
地李清醜恩

楠正直女

本妻水石

像替第五

...



癡情未解
花真意
也被梅姬
誤百年

櫻原莊言
破垣與作

余孫
與六九郎

像登第
二十九

三十三卷百發



たいにねのえつふか
まのる 故たあつてはちん
まうつをりし末不勢
きふらら〜

鬼窟越 妖怪
おみまの
ようりくとい

小鴉
をさみ

像登第
三十一

伏魔傳第五卷一

口六

且草玉堂印發

菅領やき



二 及びか



三 かのあや

開卷驚奇俠客傳第五集總目錄

壹卷

第四十一回

豪袁說菅領密助奸謀
恭勝乞放免且遇舊僕

第四十二回

媚權門就盛偽君命
逼姪女正直促親事

第四十三回

假諾誓姻家寶復舊主
巧揮智辨女俠窘叔父

第四十四回

狼唄岳翁漫售恩愛
痴情新郎暗抱燕石

第四十五回

宥怒守護議再策
忘義縉紳做擬使

參

第四十六回

飛一鍼賢婢投強人
感奇遇忠士話既往

第四十七回

遠江洋中奸黨溺良善
難波港口老僧示將來

第四十八回

感義騙賊知昨非
授計勇婦免偷兒

第四十九回

鬼瘤越豪俠斬妖物
探原宅莊官誘勇士

第五十回

受恩忽忘恩
救禍却得禍

總目錄終

本集起應永十九年冬十二月盡二十年春二月但第
四十九回以下復話應永十九年夏四月事故歲月有先后焉



四 小ひま

五 新枕の下

六 遠江のり

十 鬼瘤の下



十一 さき家の箱



九 九人のまこと



八 弘明のや



七 さき家の箱

俠客傳第五集列傳追加姓名目錄

將相北畠三位俊泰卿

武士掛橋和太六

莊客伊勢國榎原莊官破垣與六作 孫與充郎

奴隸鑣取葉四郎 浮屠逆旅老僧

婦人浦風 小鷄 強人遠江洋豪傑

通計九名 此他歩卒莊客奸黨強人之姓名選者多今亦不筆焉 與前編所出二百二十名并一百二十九名

前集作者の文章雅俗相半して情景と述事自在と得たり。故書肆勉てその体裁を效ふべき由とのみ依て崖畧彼口調の摸するところども各得たる處同くうひべ竟ふ全く彼は似るを得と怒み我得る所と棄て彼は効りんとせし極めて奇字と用うる所も多し。又文字あるも唐山の小説中此俗語採てすれども座右の小説の書之きふ群玉堂頻々遲滞と責ふ依て只暗記の任せし盡ぬ事の多うと看官幸ふ恕察して深く咎むる所勿れと云。

開卷驚奇俠客傳第五集卷之一

浪華 赫園主人編次



第四十一回

豪表管領小説と密小奸謀と助く 泰勝放免と請て且舊僕小遇ふ

再説畠山左馬介持永ハ楠姑摩姫と眷意して其叔父楠式部少輔正直ハ豪囁く婚姻の事と説遣ハ姑摩姫一切従せしめ齊天行者豪表が謀計の随ハ七劫奪んとあつても疾く姑摩姫ハ悟らまて大に恥辱を被りければ怒ると雖も為術と知遊佐就盛ハ商量るハ就盛三椿の法と説て媒妁甘んじ以て持永更ハ歡びて篠持媒鳥ハ京都への使を命ト歳暮の佳儀と於へつ國産數種祿齋ハ密意を恣々と言舎りて手簡を投出て與へけり媒鳥ハ肯て領掌して即て京都へ上りて満家の前ハ出事の情由を悄悄ハ報て件の手簡を

通與ありふ満家は是を披閱る赤坂の下に著てより昼夜肺肝を碎きつ
 きぬぐの差を換て姑摩姫が莊院を窺へども表皮の光景を知るのよせ内密の
 羨ハ識ぐけは靴を隔て癢を搔く心地のよと詳悉らむ依て愚按を廻ら
 ずの假の他と督姻を結び宿所の迎令虚実を搜らば心操亮然と七分明き
 他若異心る時ハ既の稟上する如く幾個の勇士悍卒を得るの増て當家の干
 城とるるものべく子孫の智勇の者も産まば上の對しとも忠るべし彼反額女を
 浅利餘一が請うる先蹤るゆものよと然とて在下色の迷ひく稟とる聞者こそ
 唯封邑の後患を絶て當家閑運の吉瑞と做まらるる之倘亦怨敵の志を掃
 まば其色願まじやひ自然一個の婦人あり縦令幻術のりとも宿所の閉箆
 たるうハ何程のりあるべき結果んる石を以て卵を壓ぐ如くあるべし此を能
 御賢察りて尊慮も慥に悔を存す日外五十日榎隆光が夜稠せし時奪取

たる楠家の重宝錦の御旗菊水の旗代々の古文書那時没官せらるる東西御
 許ゆる不在其賜るる納米とむば姑摩姫必す許諾せん這一件ハ在下が弱冠の
 疎忽のよ何内守も豫め商議するらるる委まき情由ハ就盛が年始の
 佳儀の出京せん刻直の稟上る旨のべしを記するける満家の素も愛児の
 持永のりるる這へゆき大事をば左右さへ許可もせど先豪表を
 招来らるる件の手簡を指示し老師ハ何と聞るやらん愚見が卒尔の了
 簡ハ毛を吹て疵を求る端とやらんといと危殆し那楠家の俺祖父義深の時より
 多く代を累ねるる怨敵のり過頃姑摩姫が獄舎の在り人をとく数殺せん
 と為しるものも冤氣極を解べらるる萬の一も過差のり世の胡慮とるる
 り然ども老師の示教ものりると問ふ豪表横手を拍て這籌策決めて妙
 現郎君ハ今世の多く得難き才子のり頻に賞てさるる日や曩の貧道法術を

も。う。あ。ち。や。わ。ん。の。こ。ま。ひ。な。
 以て那莊院を残り隈なく窺ひ知てはども
ちと げんとあ
 姑摩姫が心術の今些疑はる
ちと げんとあ
 他
あまのこころを
 ぬる少の幻術あつて心地を露きまへを欺謀らんぬ色情の過るまへ
あまのこころを
 色慾一番萌え時ハ那幻術ハ尾の如く解て效験あつたるら
あまのこころを
 凡て法術の習り
あまのこころを
 さまと其人を得ざるうハ出家の色慾を説くの憚りたはるされハ黙止て今ま
あまのこころを
 稟さるる然るを即君弱冠小と思召出させしつらハ実ハ凡庸きどと謂べ
あまのこころを
 猶
あまのこころを
 疑々思さるる一議を菩薩ぬをりて其冥験ハ因にさるりてくと道より
あまのこころを
 袂撥合せく印と結び眼を閉死を唱へて念ぶる半响許徐く眼を閉き
あまのこころを
 宛
あまのこころを
 小と咲てあけるハ貧道目今神通の三昧ハ入て覗ふ小即君の筭りぬハ如く色
あまのこころを
 慾をぬる他ハ中らハ心を轉ど吉とさるる疑もさるるのうら
あまのこころを
 那姑摩姫が強
あまのこころを
 情なる父祖累世の怨家として當家ハ心と措き急速ハ兼引べり
あまのこころを
 遊
あまのこころを
 ども上の権威と以て名とさる時ハ忽ハ違証の罪とさるべけまハ兼引るも
あまのこころを
 遊

ま。あ。ま。も。を。を。こ。ま。ひ。な。
 佐氏ハ此美を以て計策んとりつらるる然も他ハ柳營の御説とゆふも輕く
あまのこころを
 信容なき者らねハ猶遊佐氏と相謀りも箇様ハ行ひぬるも遊道
あまのこころを
 折んぬハ貧道ハ常の中ありとて其謀界を漏ら告てくと一度即君と枕席を
あまのこころを
 共ハ其心ハ漸ハ解て寔ハ飯降也ハ其ハ希代の名法ハハ相応
あまのこころを
 ねど期ハ臨まハ即君ハ授け稟也ハ遊佐氏ハ此等の事を正直中とさる
あまのこころを
 ぬと他ハ不才の魯直人るとハ姑摩姫が敵手ハ足る者らと然も言を傳へ
あまのこころを
 他より外ハ其人ハけまハ嚇し哄して逼らせまハ竟ハ成就さるるハ遊佐氏ハ
あまのこころを
 令せ附て心を用ひ助け脱落あつるもハ貧道も那里へ往て相共ハ高量
あまのこころを
 度けまハ嚮ハ太上皇の敕使と號し姑摩姫と面を突せ上ハ千雀萬龜の
あまのこころを
 娯ハ木の端の様なる老僧ハ良しとねハ此美ハ用捨ハ入へ然も別ハ檀を設けて

男女和合の法を修し且幻術を調伏せし。此修法其男女の本命の支子の
八字を以せざるは行ひざれば所の然るは又箇様々小謀らひのるは姑摩姫が本命
知るよりいふん是も亦遊佐氏の吩咐のて整ふべし彼主上洛せしむるは試み先
其所存を這方より問ひ貧道が前知する小毫も錯らるるべし其のて向來の
計策も羞らぬを知らせぬ疑ひのるはと手小把るごとく演し満家疑忽
然水解する共持水が才智を屢賞らるるは満面の花を開き東西許多取
出て豪表が布施の曳き労を謝し春と約する其日の暇とらせぬけり余程ふ
翌日應永二十年の正月ふるごと持水の片田舎に在けり省きて何の儀式
せし朝の間に近郷の目代地頭莊官等が佳儀演ふを來りし對面家隸の
命とて遠侍して不血酒の式例の如く果する後に出仕せし處もけりは花洛の方の
春色漫ふ案出らるるものと徒然なるまゝに那智姻の手段をのぞき見る思ひ

續けて惘然として在ける處へ媒鳥が駿兵回を來て京よりの返翰ありとて
泰勝が披露するは忙しく把て閱るは父満家の直筆ゆゑ那智姻の事へも
等閑なる大事なるは來春遊佐が上洛の封寛釋小釋と商量し努急急遽に
後悔する其返言の密議の與條持媒鳥の拙措て正月の初旬の下旬と簡約の
書きしう持水とて泰勝の看せし情を譚らるる和郎は何れも思ふらん
如此に成否おつるは何とせしむる就盛が上洛を待りて皆さば遊佐も尚又這
由を意得ざるは有べしと和郎は今より大誼をなす那里往て情地傳へ能
憑き置け明日明後日就盛も必上洛せんばと道は泰勝畏るは仰のて兼るぬ
就て願ひをなすまゝに那智二郎が事小他往時おん便室近く不敬を犯し刑
件の轎子の懸入て在けるは不測の曲事と稟せども原來匹夫の草賊をば礼法
拘る者非ざるは一旦の御憤り理をなす一箇の遊佐殿の要らんとてをせし者

二箇又向後も用ひ多うんと那儘ふして當館の出入と許さる。遊佐も不快ふまんく右も左ものり下鴨口の悪き他那時の機密も多し識ては難面々遇ふ世間の漏定とも稟がら然る曲御免を蒙り時におん座漏へ出入せしを餘る酒殺を惠ませぬ他も又恩を慕ひ徳を感とあん與ふ做るものべし且の豫ても稟し如く小可ハ仇持する身あるの唯一個の若黨ふも萬不便の辨もあらず那荷二郎が面魂一僻のぐ所見されば出行る時召俱て其頭の要ふ充んと欲さるる除非那白痴物が異心を抱きしとも小可斯て上へ辨の臨みて立地小結果んも亦甚容易し是一事兩用なれば只管免させぬと屢乞て止まらず持永要時尋思して現の心も一理ありさるも他が其夜艾轎子の中小駱居る大胆不敵へも更なる什麼なる事情とも俺今尚意得がら然る再び召寄て詳く推問せし上をせる不良の心ゆ

登時免除もまじ。這等の辨も就盛の熨面の封譚ひ見よ。那首の知とるものもあつんとひけま。奉勝唯唯と言稟し。深蒲笠の面を覆。輕卒一個を若黨と。奴隷の礼服を會齋せ遊佐の城へ赴き。町盡処ゆく衣服を更。城中の持永が使者の由とひけま。就盛即て對面して年首の口誼辨竟ま。奉勝声と低うして別小悄。小稟せとて持永が稟咄さる。り。要時近衆を遠放つ。やとのふ就盛點頭て然らば使室へ通らるべし。けや。年始の佳例も。酒をも一ツ勸めてんとて侍共小吟吟て閑室の伴。間もゆさ。童扈從が交代の持運ふ古昔時繪の重宮の故実。きさる。長柄の鉢子。い。就盛が勸む。間小下物も増て思ふ。半酣。及ひける時。就盛左右と退放て。左馬殿の密議と。那姑摩姫の。り。笑つ。同。奉勝も。笑。余と。笑。さ。那姑摩姫と。取。らん。と。様。心と。尽。す。小。逸。く。其。机。を。猜。甘。ま。と。て。再。度。の。不。覺。を。採。り。し。ハ。既。知。せ。の。か。

如^ど然^らる^る小^こ殿^{どの}の御^ご計^{けい}畧^{りやく}ゆて父^{ちち}管^{くだん}領^{りやう}へ由^{よし}と報^うて表^{へい}向^{きやう}より媒^{まへ}灼^{しやく}ゆて娶^{よめ}らんとの事情^{じやうじやう}と
 即^{すなは}ち京^{きやう}都^とへ稟^{りやう}し小^こ箇^か様^{さま}の回^{かへ}答^{こたへ}せらるる旨^{さしづ}め近日^{きんじつ}御^ご上^{じやう}洛^{らく}のをり管^{くだん}領^{りやう}の得^{とく}心^{しん}は
 るやうに賢^{けん}慮^{りよ}と希^{ねが}ふ所^{ところ}に稟^{りやう}せしむるにねど那^{あの}管^{くだん}領^{りやう}の文^{ぶん}體^{たい}の密^{ひそ}煩^{わづら}重^{おも}げの所^{ところ}に
 尚^{なほ}念^{ねん}の與^よ在下^げと使^{つか}者^{しや}とて憑^{たも}て参^{まゐ}らるるに密^{ひそ}細^{こま}詳^{しやう}の廣^{ひろ}げに就^つ盛^{さか}頻^{ひん}のち点^{てん}
 頭^づ小^こ箇^か様^{さま}の御^ご係^{けい}係^{けい}の俺^{おれ}們^らの用^{もち}捨^するに外^{ほか}に左^{ひだり}馬^{うま}殿^{どの}の憑^{たも}て
 るに思^{おも}慮^{りよ}の限^{かぎ}周^{しゆう}旋^{せん}と必^{かなら}ず整^{ととの}へ参^{まゐ}らるるに酷^{くわ}く心^{しん}と苦^{くる}ゆゆひを明^あ后^ご日^{にち}の上^{うへ}京^{きやう}を
 るに躬^{かみ}て管^{くだん}領^{りやう}の拜^{らい}謁^{てつ}と這^こ儀^ぎと計^{けい}らひ稟^{りやう}せし此^こ旨^{さしづ}め稟^{りやう}上^{じやう}へとの快^たく諾^{だく}ひ
 けしと恭^{こう}勝^{しやう}へと謝^{あや}し罷^ま回^{わい}し然^{しか}稟^{りやう}せし持^{もち}水^{みづ}安^{やす}堵^と致^ちせし畏^{おそ}ては應^{こた}へ答^{こたへ}
 ちり又^{また}道^{みち}を序^{ついで}次^{ついで}に在下^げ願^{ねが}ひきりひと試^{しら}み稟^{りやう}上^{じやう}ん欲^ほし其^{その}別^{べつ}儀^ぎの
 ひと嚮^{むか}ふ姑^こ摩^ま姫^{ひめ}が轎^{こし}子^こへ秘^ひ符^ふを投^な掛^かせし居^ゐるに放^{はな}免^{めん}荷^か二^に郎^{らう}がひ那^な荷^か
 二^に郎^{らう}が其^{その}夜^よ女^{によ}の轎^{こし}子^この中^{なか}に躲^{かく}まて居^ゐるに條^{じょう}持^ぢ媒^{ばい}鳥^{とり}が見^み露^ると

持^{もち}水^{みづ}報^{ほう}てひひと持^{もち}水^{みづ}大^{だい}憤^{ふん}りて成^な敗^{ぱい}せんかどのを在下^げ中^{なか}に賠^{ばい}話^わせし
 さるに遊^{あそ}佐^さ氏^しの面^{おもて}對^{たい}して免^{めん}せしと放^{はな}免^{めん}し然^{しか}も在下^げに存^{ぞん}ずるに他^たの面^{おもて}
 免^{めん}九^く庸^{ゆう}も一^{いっ}僻^{へき}つて免^{めん}せし殿^{どの}も放^{はな}免^{めん}せしと召^{めい}措^そせのらるるに且^{かつ}に那^な
 夜^よの机^き密^{みつ}をも片^ぺ端^{たん}識^しる者^{もの}に那^な儘^{まま}と遠^{とほ}離^りるに他^た怨^{うら}み憤^{ふん}りて禍^{わざはひ}害^{がい}を隠^{ひそ}出^です
 りものるに右^{みぎ}も左^{ひだり}も久^{ひさ}後^ご長^{なが}く立^た入^いるに異^い日^{にち}の要^{よう}に備^びへるに兩^{りやう}全^{ぜん}の美^みと故^{ゆゑ}に
 其^{その}由^{よし}持^{もち}水^{みづ}の稟^{りやう}し一旦^{いつたん}と怒^{いか}りしに方^{かた}僅^{わずか}に始^{はじ}打^{うち}解^げて在下^げの右^{みぎ}も左^{ひだり}も計^{けい}らるるに
 小^この就^{しゆう}て往^{むか}ひし看^{かん}せん在下^げの餘^{あま}りたるに二人^{ふたり}の仇^{かたが}と持^{もち}て一^{いっ}個^この女^{によ}を畏^{おそ}るに
 是^こる者^{もの}るにどしどし二^{ふた}名^なの男^{おとこ}の七^{なな}萬^{まん}夫^ふ不^ふ當^{たう}の勇^{ゆう}力^{りき}あり他^た奴^{やつ}們^ら倘^{たう}這^こ地^ちも来^きるに
 憚^{おそ}るにゆものひぬれ只^{ただ}一名^{いっぴ}名の若^{わか}黨^{たう}ふけしに那^な荷^か二^に郎^{らう}と身^み邊^へに使^{つか}ひて他^た倘^{たう}実^{じつ}に
 取^と服^{ふく}せし一方^{いっ}方^{ぱう}の捍^{けん}城^{じやう}あるにのるにさるに荷^か二^に郎^{らう}と時^{とき}に赤^{あか}坂^{さか}へおとせしに在^あ
 下^げが伴^{ばん}當^{たう}ふ俱^くせんを許^{ゆる}しめし胎^{たう}悦^{えつ}ふにこの就^{しゆう}盛^{さか}異^い議^ぎも及^{およ}ぶ其^{その}辭^{ことば}



さしつかへなく
 らうのうらやま
 りんごのさき
 左

田代

大入道五郎左衛門
 七
 五郎左衛門



豪右
 表一
 識
 満家
 疑
 決

ふた

信長伝三巻

意得たり。那奴其翌朝回来と云々。然る大胆と拵きし。拙者の
 夢中も知れ疾知さる。赤坂殿のあん賠償も稟せ。緩急の段是非の事。
 這爰和主心得て品よく稟聞くら。原来那白痴漢の頭を刎死奴も。こも。
 希代の騙局を以て倒し使役ふ所も。いと要時一命を助け措き。的。
 希代の殊更の所用い。尚和主も使ひ。赤坂殿の御要も。た。の。拙
 老が素より希ふ所。と。所て泰勝大の權び。然ら。直小召連帰る。主人の詰話
 稟。二三日杜措て。又。返。を。ら。の。就盛点頭て。その隨意のせ。二
 三日ほど度毎の折ら。及。の。但。那奴の心術究めて不敵。奴。の。道。た。ぬ
 中。小心せ。忽緒。の。的。の。と。の。泰勝兼諾。七。杯盤。と。辞。別。と。告。就
 盛が前を退げ。就盛の答。田鶴九郎の吩咐。荷二郎を隠出させ。泰勝の邊。與。せ
 け。泰勝。と。請。合。と。即。て。伴。當。の。交。へ。鶴九郎の謝。と。赤坂の陣館。と。投。し。く

回りけり。當下夕陽。西の落。て。雪。と。催。と。夕。旗。雲。の。光。映。薄。ま。く。曠。始。る。黄。昏。時。候。の
 向。く。狸。の。未。通。女。が。衝。く。胡。鬼。子。も。手。毬。の。音。も。外。の。絶。て。物。色。蕭。然。あ。る。れ。う。入。の
 荷二郎。ま。の。俱。く。ま。泰勝。の。又。礼。服。の。貌。を。更。に。蒲。編。笠。を。脱。棄。て。世。の。畏。憚。を
 回。り。去。く。の。但。見。ま。去。向。の。樹。下。の。藁。菰。を。鋪。破。手。巾。を。頭。上。の。捲。く。窶。く。た。二。個。の
 乞。兒。が。几。遍。と。頭。を。叩。き。て。声。憐。げ。の。中。や。殿。様。お。正。月。の。お。祝。賀。の。唯。一。錢
 惠。ま。せ。賜。ひ。ね。の。と。と。勸。解。の。乞。ふ。と。前。の。輕。卒。の。若。党。が。声。高。中。の。振。絞。り。に。
 中。と。ま。這。奴。們。道。妨。の。這。頭。へ。出。て。什。麼。と。の。片。退。む。と。罵。る。と。抗。愾。心。を。ぬ。ぬ
 檜。桶。と。突。出。し。中。の。御。慈。悲。の。と。負。縁。の。間。の。料。ら。も。泰。勝。三。回。と。照。せ。て
 互。の。敬。馬。と。駛。き。け。る。物。の。と。んと。と。那。乞。兒。の。想。ひ。や。返。去。し。左。右。ま。く。の。と。や
 殿。様。這。正。月。の。餅。一。つ。も。飽。の。せ。ぬ。這。身。の。因果。も。原。の。の。身。より。出。る。儲。力。の。
 附。及。せ。入。る。ま。も。有。ね。と。今。の。又。奈。何。い。せん。他。所。の。軒。端。を。假。寐。の。夢。の。も。の。

往昔と恨しき心一合飲せぬやよん慈悲いいと口説が如く衝をらふに那
 若黨の大い怒り這奴甚大胆なり我主人と執事と赤坂様の御家中
 あり解らぬ謹言諄々と皆許し置べきと襟上把柄を曳居ると泰勝やと
 喚禁めて今日大事の使節ありを乞見を命へて作麼せんを那些退て通を
 や現這年の首より飢寒を只顧み東西欲がるも無理をなす餅も吃へと置
 紙帛を撥搜つと錢二三文取出し紙を拵つと撲地と投ま音を聚み搥
 拐り上て数回押戴き天晴か慈悲いお愛情ありお殿様のお賜物噫辱なり
 有難く余後とて久後かんと目と賜りいへと追従輕薄猶諄々と几回とく咳を
 看ぬ態をて泰勝へ脚急み去過ま眼なる奴隷が酷やく你们何時でも今
 日の如く主人と思ひせよ當の錠が外まらん果報的奴と一言を罵りてゆく
 野徑の竹林の雀の声静まりて隱く見ゆる燈火の赤坂の館の歸り多泰勝へ

荷二郎と己が子房の等せ置て独持永が前出遊佐が回答を箇様くと
 耳語告てその後那荷二郎と召俱し一五一十と話説りか仕ては
 前罪を息免りて在下預け既り別心異心もいへば御婚姻の期は
 暨びく用ひぬるもいへと忠告せしとのひ瞞ま持永再應の尋念の暨
 た遊佐も然様ありて要時和主預るなり然まも那奴へ辭者されば
 小心まるふま及びり由断して取る道と戒めらる許しま泰勝大の悦
 己が子房の退き出り急く荷二郎と喚出し晚飯と与へ酒を喫しその身も
 共の喫啖してこそ梢の地を譚らるなり郷日汝を救ひしと與心と配り長
 總奴と現ひ見まも未日と経ぬるま這ぞと思ふ證據も出せされとも竟ぬ
 他が本意を探らんも難く先方便と以て郎君のおん怒と勸解
 遊佐氏を乞取て箇様と料理ひま今日よりと俺方と和郎と措も異うへ

前篇の作者
多藝と誤て
多氣小作
多氣郡名を
其當殿の掣
多藝を以別
然して今
更其誤と致
む挽多氣小作
ものへ看官の
為ふ給らる
うんとて

わらむ但時々の遊佐の城も回つて那里の容子とも覗ふらとよろめまき久後の憑ひ
 金大事もあまご開よりも靦面りて和郎と勞まをさるひあり開の方邊回り路の
 東西と乞へる乞巧奴がひよ那奴と面を照火せし時何とゆらん認得たる的小肯
 たりと思ひしをも急い案ひ得ざらん徐小考ま他へ俺身が伊勢の多氣小作
 使隸ひする草履取めと名と敵介との的之郷小稻城が女兒信夫と豪奪して
 其父親の丈作奴を殺しする時分田與記右門山勝杉内とのひ若党と共小密
 諷小関りて緋金露頭小及びする時與記右門杉内へ斬罪せし敵介の追
 放せらる然る小介後怎ゆと那様体ゆれ作り小けん左小も右小も俺と認りて
 敬馬さるる体ありて言を設けて哀憐と乞ふ意と急く猜し言へ小銭を取ら
 るるやう小て金二三歩と與措けりさても猶俺這所小在と若党の輕卒奴が高
 らう小言聴せし言へ那儘ゆて棄措けりさる又他奴も聊の才覚ある的のれば

奴隸小して馳役つて他の的の勝る一倘打棄て願眷む他つて怨もて仇る是の
 幫助ふらむともの難し。さまばくうぐ這處へ申入んとあまごも乞巧の形ぶ外見
 多し因て和郎と勞まらる今より他奴が在處と見ねて緋金と説听せ這金を
 のて身の装ひと他郷小至り調へて日数を歴てきり氣無く訪来るや小料らふ
 べし。よ酒喫て快く往ね白昼あて妙らむとと金一兩と遞與まへ荷三郎
 異議なく領掌して開の奇妙らるるひ他奴が且那と認着しをり緋金の氣
 ぬ推查しぬさる伊勢めて使ひのひ敵介男でいさる急く喚寄られて
 あん便利小らるるひひらん。そ一走まらるる来んとそが佇立て往けるが平時たうり
 ちて立ぬり仰小任せ那樹下の見ねぬをひひし開處ゆをを遙小這方の
 灰廬の軒下の寐轉びうりて喚寤し緋由と説听せし始の匿らうりて
 竟小実と吐て那敵介へ去給の春且那と共小伊勢國を追放せしひども

素より他邦の親類も然とて國中の徘徊せし捕へ斬るべしと聞えし。幸うとて大和の立越え高市を吟ひて賭博を好む。銀一錢の本錢をひき。剥盗と業と。怯弱人どもを嚇して此の本錢を設けり。食博奕の輪盡ければ。伏家の奴們が醜態を命て無底の不九郎と喚びぬとて。此底の無き囊は東西に入ても溜らぬ如く他が博奕の下手あると嘲る共。鳩鴉の鳥が夜々小鳥を取啖ふ。剥盗を擬へ秀句うるべし。さうと敵介の悟らざりて。竟て自己も不九郎と名号する。とのあるへ可笑きゆゆい。侍て或時一人の旅人を剥んとし。うらふ案外。その旅人が心剛なる手利のあり。股と肱とあぢうるる。瘡と二箇所負せし。跟迹と晦き。逃るも其痛大い。腫上りうけ。辛くも残金と懐ふ。龍神の温泉の赴き三廻り浴くと愈え。衣服へ更なる脇差を賣て病賃充て。まゝ更の亦剥盗も。むむむ。為方も。落魄て形。の如く非人。成下り。うらうら。

偕て剛才且那を見と不審。あひく。言を設て外る。身の不造化を訴へ。果して三歩の金を祝ひぬ。明日の始衣の一領も買ひて来り。這御館の参りて訪ねをうんと思ふ。折々又更の和主を使ひ賜り。さう一兩を賜へ。まゝ天雨も登る心地。快く他郷へ去て打點と救兵。いつ就て参りて拜謁せん。其時意衷のりども。尽しと。おん禮禀。まゝと。大く歡喜あり。まゝ不日参上。せら。定ふ。このふ。恭勝点頭。て。まゝ。那奴の心易く。来ら。情由を。郎君。稟上。て。這方の留めん。その序次。和郎が。絆も。尚克。提成。稟。置て。恩顧の者。小。做。を。死ぞ。心長く。時節を。待ね。俺。今。も。獨身。の。萬事。心。細。く。今。捻。の。運。氣。の。直り。の。年。の。元。月。の。元。日。の。元。日。の。元。日。即。時。和。郎。が。帮。助。を。得。る。う。ら。ふ。敵。介。之。來。集。り。世。の。怖。し。き。的。の。や。祝。壽。の。喫。く。又。殘。骸。を。取。出。し。柱。の。脚。の。動。じ。は。荷。二。郎。も。矢。坪。へ。入。て。更。關。る。ま。心。醉。を。尽。し。其。依。倒。さ。り。復。た。り。け。り。

第四十二回

權門小媚て就盛君命を偽る
姪女小通て正直親事を促す

却説遊佐河内守就盛は正月三日河内國石川郡と打立て京都より將軍家
義の年始の拜賀を稟しける。輝果て管領畠山尾張守滿家の邸に到り同く
佳儀を演けし。滿家就ち書院へ請ふ。恒例の式竟て後所要もななく。今暫く此
處ゆく休息せらるべし。公用果るる。緩くと御意得たり。さるる。非定と就盛を留
置て滿家の室町殿へ出仕しける。亭午過る頃。回り来て。閑室に招き入れ。茶を點下
菓子と勧め。更一杯酒を飲正へく。就盛と管待のゆを左右と遠退て膝を合せ
貝くやう。知らる。如く姑摩姫が去秋五十日槌電次と討する。驍勇智謀の賢き
る。驚く。餘りなり。等間ふし。棄措。終る。六國家の禍害とも曳出さへく。思ひ。六
愚蒙の兒左馬介と萬事貴殿の打憑とて八九の社院と按察せん。為赤坂の陣

館の遣。う。ふ。想。係。る。く。那。姑。摩。姫。と。拙。兒。の。娶。ら。ん。と。い。ひ。お。と。せ。ぬ。強。ら。ぬ。色。の。漏
きて。所。望。ま。る。と。も。聞。え。ね。ど。も。他。女。が。強。情。な。り。決。り。て。隨。順。さ。ら。ぬ。る。い。鏡。の。映
さ。る。看。が。如。し。任。他。適。多。路。み。く。と。假。し。親。事。を。許。諾。さ。す。も。弱。冠。の。拙。兒。が。配
耦。の。六。半。の。餘。り。う。る。心。地。し。持。煩。の。ん。と。危。殆。く。ら。ふ。と。貴。殿。の。商。量。し。う。と。又
る。八。実。小。然。る。り。る。飲。貴。殿。の。妙。案。怎。生。さ。や。と。問。ふ。就。盛。悄。々。回。へ。く。仰。一
遍。い。さ。る。り。の。い。但。し。在。下。が。存。在。る。ゆ。の。女。の。總。て。水。性。の。的。る。ま。六。除。非。姑。摩。姫。只。今
こそ。父。祖。の。遺。訓。を。一。涯。小。守。ま。し。任。情。を。稟。さ。す。も。一。度。枕。席。を。交。し。る。只。漸。く。怨
恨。も。解。ぬ。べ。し。さ。ら。ぶ。息。を。一。轉。し。て。歡。喜。と。さ。る。り。も。と。そ。久。好。些。ま。異。心。あ。る。ゆ。の。い。迎
拿。せ。の。ひ。て。六。畢。竟。一。個。の。少。女。子。な。り。四。相。を。悟。る。才。あり。て。ま。幻。術。を。能。ま。す。も
怎。程。の。り。う。い。へ。き。齊。天。行。者。豪。表。が。法。力。も。い。は。開。の。怖。ろ。い。思。ね。ど。も。南。北。朝。の
ん。事。と。累。世。冤。家。の。故。と。り。決。り。て。從。ひ。稟。ま。す。因。て。在。下。が。存。在。る。ゆ。の。是。を

上へ稟上ておん旨を請ひ南北兩朝御和親のうへに其臣互に遺恨のなきを
楠父子の輩へ代々南朝のおん與ふ屍を戰場の曝しする忠心無二の將を
開後を憐みのふ僥倖ふと姑摩姫のさまたごも女流のひるれ所領を與へ
臣ともあつて依て畠山滿家の父祖の時より河内を領して代々楠と鶴を削り舊態
最弟一とまごも末子左馬介持永を姑摩姫の配耦せし泰晋の好意を結び
冤氣始て氷解して永く恭平の瑞方べし然らば久後持永の楠氏の舊領を支ち
與へて出生の兒小楠を名告せ祖先の祭祀を嗣ぎし就て先づ納采の郷尚の役官ま
さる楠家の重宝錦の御旗菊水の旗且亦正成己来の舊記をも更めて音
物とまごとの大槩の整ひひん徳て他が叔父正直と嚇る威嚴を逞しうして
假親と做し姑摩姫を介抱して赤坂へ嫁らまへし若舊態を承る命に従ひ
なまごの姑摩姫のいふも更なり正直も違誕の罪を糾きて重き科條の處せらる

べしと吃と囁命の緋十二分の教正ひん飲居ても姑摩姫従はば將軍家の令を
听ぬと名として結果る法もあつべし又正直も他のいふ違誕の罪を蒙るといふ
叔父を害する悪名は必に従ひてかひなき愚按へ如此らまごを左馬殿のい商
譏み加つてこそいふまごも賢慮の愧りぬ飲覺束かくいといふを听て滿家の
肚裏の想ふやうけい豪家表が前知小違誕を就盛果して將軍家の御誕を以て
せんと説り然らば向來の緯どり必行者が神占み漏らるるべしと疑念
忽ち解しうづ想ひを免余と打笑てゆる趣開意を得り嚮小行者豪家
這一條の吉凶を問ふ既小貴殿の謀畧を一事も錯へば前知して遊佐主采
春上洛のうづ箇様く小謀らるべしと甚妙計なり然れども尚のた他を
南朝の餘孽らまご上の御誕といふと雖ども死のう推諱ひるるべし且
正直の義絶の叔父なり今へ上の嚴命めて姑且和順まといふも心を放さる

ひけまは他一名のうらみど。預るべき氣象のあらむ。依て今些妙なる處の同くは
 嗟嘆の太上天皇の勅詔にて正成が後と憐れませぬ。此事必然成就。御尚
 一千金と貶ひ折も柳宮の對しなり。さあぐ不敬の語を吐くも太上天皇の恩賜と
 のいひ推辞ならぬ。那金を受納めたる光景にて成否を知らず。このより這議の
 如何のべき。このを就盛只管の横手と拍て感心。今始ね行者の神通今番
 在下が秘策と急くも知て告らるる。回さるる怖るべし。開尚其該の緯より太
 上天皇の勅詔とよくも接ひ着きて。智畧とのひ法術とのひけの這うへの妙策の
 べくもいふ。このみ満家手と掉て這箇の一個の難美。この一件と明く地の上
 の稟上ごうり。開へ想うても看ゆべし。怎の所見。この緯もさふ父祖代の怨
 敵。捕氏の孤女と娶るる。このよく及く。其御猜忌と蒙るる。この上お誣者の
 口とも開くべし。且今年の御讓位の御沙汰も。開時小姑摩姫。怎るる叛心と

抱ん事も料り。このさ。旁然様の緯と當職の居る俺們より。目今稟上ご
 う。假令智智整ひ。このも當分の秘措。決して口外さるる。信箇のよく姑摩
 姫が。男心をさゆ。究ら。開時へ謀計の與る。要時持水。宴の如く。召使ひて。試
 と緯も無氣の稟上。て。遮莫姑摩姫。肯い。て。緯尚。變卦。小暨ひ。太上天皇の
 勅宣。このひ上の。詔意。とのひ。事の。倘御耳。入。と。罪。俺們一家。在。ん。這
 義。の。怎麼。さ。り。ん。と。い。ば。就盛。小首。を。傾け。そ。仰。ゆ。い。ども。甚。り。賢慮。の。過
 う。の。軟好。些。姑摩姫。這機。を。猜。して。兼伏。せ。る。事。の。り。とも。當今。在。下。手。を。超。て
 何處へ。出て。訴訟。ふ。べき。家。隸。と。京。へ。陟。ま。とも。その。訴訟。の。管領。の。必。所。知。の。係。る。は。
 是。又。防。ぎ。の。み。易。し。開。も。も。さ。く。然。る。緯。の。さ。道。程。の。間。者。と。出。て。備。は。社
 院。より。京。を。望。て。走。陟。的。の。り。も。せ。六。暗。撃。の。し。と。口。を。塞。ぐ。ん。這。等。の。緯。の。機。小。應。し。
 變。の。應。し。て。在。下。が。禍。害。を。防。ぎ。り。べし。おん。心。易。く。想。さ。と。下。千。の。一。個。の。緯。發

覺る會在下が身小曳負て肚撥斬ん分のり。這是累世御被官する嶋
 恩の報い稟まへき微志もふいと。さも潔白く道放た。満家大の歡喜吐
 憑き貴殿の義胆這上へいふさうなり。除非這緯發覺て貴殿の身上の
 係るも俺們が侍て在るうへ身小代て救ふべし心勁く想とて下まうとも這
 千一の事這妙策の豪表行者の未然と查せし神美るまへ成就せん疑
 慮さ。さへ決りて那此のりも心小莫懸らとと。左も右も這一條の貴殿の
 任せ稟るまへ隨意料理せらるべし。尚豪表の所説の姑摩姫の幻術のれは
 緯と左右の假托て遁るるもあはるべし。兼話するその時他が本命の
 支干の八字と證據の與の寫せの抑八字とのり。漢土後世の誓禮のその媳婦の
 産する年月日時の支干と寫て誓の家小贈る式めてとと。庚帖と喚做す我上
 古小婦人の諱と丈夫と定ひる男子の名告りと相首する意り。我邦の誓姻の

未例のなるも。姑摩姫の文学ある。那些の縁由も知りする。他日違變の
 らる。契据の必通りて寫せのり。且その本命の支干と以て調伏の法を行。那幻
 術の忽破ま。縁を結ぶに至るべし。と回るも説措する。此も克く意得る。正
 直小傳托せらる。兩三日の中。那楠氏の重宝を齎して。條持媒鳥を下を
 へけ。當下の任。料理する。這餘のり。時小臨きて。脚力の道とせられ。べ
 頓小回答をま。と緯脱も。詭囑ま。就盛の懷中より。矢立の筆を把出て。
 疊紙。這等の由と。未女く記て。兼語を満家般く。安堵して。童扈從と喚出して。
 更小銚子を加へ。酒肴を増て。就盛小自ら酌して。強勧め。且。就盛も。怡悦て。
 醉を盡して。ややく小辞して。旅第小帰りけり。然而。就盛の其詰朝。三管四職を
 首として。知音の方を打巡る。年首の佳儀と。速竟り。熏昏頃より。京と出て。河
 内國へ立回り。就て。赤阪の陣館と訪て。持水小の佳儀を。演今番満家と謀り。

首尾を箇様にと依語示して如此の六豫ての計畧十二分の教正ひくひなりと
 の小持永大の歡び手の舞豆の踏を覚えど既咱東西の如く漫小急
 迷るを就盛の推禁めて声と悄め倍の謀り課せしども那姑摩姫の輕くき婦
 人の非むべおん心長く等せぬ一應二應の往復ぬすの決して會得ひ稟はる
 らば京都の遺し措きする後條持媒鳥小巖君の令舎らるる茂もは他が下着の
 其上の正直の稟與むべし必忙まりぬると重復戒めて就て城へ回りける西目と
 經て滿家の條持媒鳥小密策を授け去秋隆光を誅せ折遊佐が許よりおとせ
 うる楠家の重宝と納うる宮を將軍家へ披露せ暗く小己が許の留措うるを
 齎して伴當花麗小装束せ遊佐が城へ遣しけは遊佐も寔小畏する面色
 去て媒鳥を上坐し請就しめ誕意の旨と听しく媒鳥即ち一揖して豫て吩咐
 らしきうる如く太上皇の恩勅と室町殿の誕意の旨といと鷹揚小述ける就盛

謹で羨り馳て有司等小商議して正直とぞ喚せける就盛が佳料理ひり故の
 俺城中の甲乙ゆも机密の漏るるを怕る満家と喋り合せ寔小京より命令
 ありし像くおせし正直の怒るべし大夢中も知れ室町殿の内訖ありと遊佐の
 城より使来りて即今來臨せらるべしこのひけは心麼緯からんと駭きて快く時
 服を更むる伴當を忙がして遊佐の城へ來ぬけは就盛書院小を請ひ媒鳥と
 率て出て來り那督姻の一條を緯長中説听せ太上皇の勅書とも賜ふべきの
 るまども畢竟一家の内縁小面平く公法を用るるべくもはらぬ持地と御書兵
 賜ひぬ然れども姑摩姫が疑念るまも非るべき歎因て柳營の御内書を管領小
 賜ひる者こそと以て契据とせ姫も疑念る心と又那重宝と納采小をささひ庚帖と
 寫しむべきのまをせりと嚴く命遞与しなま正直謹で頭を低熟听て大敬驚き且ハ
 呆れと為術を知れ迷惑一身小輻湊する心地はまさと柳營の御説といふ力なく

仰の趣逐一おほせきまじり小畏こおそていと先御請まづおんまがらひを稟まうりて就盛あつむ打向うちむかひ語の端はたを更さらりて河州かすの
 怎いかと听きゆららん想係おもひあひるる院宣御誕畏いんせんごたうのこゝろて六むへども進退しんたい谷やる心地こころしてこそいへ其
 故ゆゑの前番左馬介殿在下まへばんさまがわいどのしたと招まねきて姪女めいむすめが婚よめ姻いんの縁ゆかりを頼たのむふ黙止もくしぐて那里なれへ
 立超たてこえ言ことを盡つくしと説とれども他われの一切いっけつ肯うけを固かた様やうに稟まう断つて強つて其その女むすめ僧そうの倣なま
 らんと稟まうり今番いまばんの并なら六等むく等らしくらねど知しる如ごとき任情にんじやう的てきの在下したとも平素へいその疎そ
 疎そけけは偏へん窟くつの推辞おしげなるべしまは貴老きらうのおん提てい成せいめて這一件このいっけんの媒まひ灼やくへ只ただ管御くわんご
 免まぬを蒙まかりて餘人あまの仰おん属ぞくららんやう管領家くわんねいけへ仰おん達たつせらまは無比むひ類るい幸さいふふと恐おそるる推
 辞しんとまるを就盛あつむ听きて居ゐ文高ぶんたかゆり开ひらい又また怎いかとゆゆるぞ听きる如ごとく上うへのさるるは太た上
 皇みのみ慮りょより出いでる恩おん勅とくよりのと貴方あなた叔父おじの身分みぶんとして唯ただ一女子ひとむすめの令たま姪女めいむすめが
 固辞こごせらまらんと一應いっおうの傳達だんぱいももく這これの辞しせらまらんと六道むくどう難がたうらずは智ち高たか左馬さま
 殿どのの憑たのまらずは事ことのわりり知しらねども开ひらい普通ふつうの縁ゆかり譚だんめて熟じやくせらるるも又また世よの常つね

今般いまのととと同おなくらど固辞こごせらまらん違勅ちがとく違誕ちがたんの罪つとをしらるるるのとぞあるる
 這この辭しのと管領くわんねいももくく稟まうさまららん然しかでも貴方あなたの辞しせらまらん心こころを定さだめて回へん答たうられと
 想おもひの隨ま小こ窟くつひまは正ただ直ただの大おほ鬼胎おにたいと不慮ふりょ背そむけは汗あせ沸わて辛くるうらと陳ちんぶるやら然しか兼あ
 ままはと恐おそ懼こし違勅ちがとく違誕ちがたんとあらうへの再また遍へんも再また遍へんも姪女めいむすめの稟まう諭ごんをま管領家くわんねいけ
 這この由よしを宜よろく憑たのまらずは但ただ姪女めいむすめが強情がうじやうなるる竟つひ不遁ふとんるる所ところなくは怎いか様のやうの縁ゆかりを稟まう
 出いんの料りやうりがては是まふ當惑たうわく至極しごくせらまらん慮おぼをあん息いきしらん久ひさ就盛あつむやらく面おもて
 和やらげ然しからら美諾みだせらまらんかん請うけりて趣おもひの在下した解道げだう稟まう上うへてん开ひらい安心あんしんさら
 べべ然しか而しか恚いかののゆゆは是まふ賢姪女けんめいむすめの義烈ぎれつ驍勇せうゆう智謀ちぼう幻術げんじゆ兼備けんびしられば容
 易やすく納得なとくせらまらん貴方あなたのの苦勞くるらう查入しらひりりら然しかまま上うへの御意ごいの畢ひ竟けい貴方あなたの
 姪女めいむすめのの思召おもひまりり而已のみふら然しからら紛雜ぶんざつき情じやう由よしをま知食ちじやくさらうらもも然しかるる推
 過あ辞しせらまらん必かな御氣色ごきしやく々々と在下したままも御不審ごふしんを被かるるも有ありらばは克かつ

謀略と籌計と左も右も令姪女の許諾する料理と不肖なれども在下
 共小商量小預るへけと先とや那里へかん旨を傳へ怎樣小ゆるさるん回答と
 尋思もあらん好意ありげ小私語バ正直聊想回してさる直小八九へ赴き姪女
 かん旨を傳へ一倘左右と辞る小貴老のかん指揮を乞ふ緯あらん萬事一昧地
 憑き稟とと繰返一道措て馬を急めて出行けり再説姑摩姫の前番如意宝珠
 院の上境の路次にて奸人どもの商量りも畧奪んと志をけるを快く猜し奇計を
 設け幸く虎口を脱き回し復一郎安次も遊佐の城より回を居忙しく出迎へ
 轎子の見えぬを訝り向ふ姑摩姫徐々小便室小入て安次と垣衣とを身邊小近着
 有一次弟と語る小安次思ひを奉と握り開い安うぬ緯小按ふ持永就盛
 們前般の遺恨と挿も豪奪せん謀りらん在下も今日遊佐の城の後野へ
 参りひひ小遠侍小等せ措て公用繁多るまを成就せぬ出ても来ぬ一胸餘

安閑と時射を移し一後菅田鷹九郎とりの男を出して這里の莊院の田畠の寡
 宅地の来由も宝珠院の智正禪尼小御所縁の有りのを尋問ひひ小在下各
 へて稟中智正禪尼主人の姑と這縁故をも幼少の時那里も成長ぬ又莊院と
 田園と在下父隅谷維盈主君と親育せん為小當時室町家の御法をりて買合する
 あり其折の沽券契据の文書在り貢税の村長がひまふく相違與へ他と喚て
 向ふと稟て回りのひね按は是程の緯を以て在下と招く言も非を查る所就
 成敗も件の机密小関りて在下とかん伴當小させとに招き隙取せるあぞゆらん
 今日より後在下がかん跟随仕まらば怎里へも出させぬと或は怒り或は歎きて
 情小地小諫も姑摩姫聴てうち領き小偵查明查此も錯いを就盛も持永小荷膽と
 你と喚せしる小儘道他們が謀らんとも怎程のひら有言のまも現小心小
 及とるけも小後何方へも戸外へ用捨さき然とも他們も亦這儘中て止べき

ろうねい又術を換て二遍三遍も謀んことを較計らる。随分内外の心と配りて
 脱落るさやうの為へ死の時臨むと變ふ應る。善策の幾個もあらん。酷なる物を
 相ひそ駭く色なき形容の安次の更なり垣衣も開明查の感服と萬神
 こと下せぬの後安ふいものうら執念崇る奸人の多有を亦怎ふせん心の既ひん
 ると隨分小心仕らんと言稟して退きける然る復一郎安次の垣衣を商量て
 内外の出入の心と配り農夫們が怠惰を禁め此の由断せざらぬ或日補正
 直ぐ伴當夥多連率て不意来ふけは安次則姑摩姫の告て例の書院の迎へ
 入る姑摩姫も衣服と更ぬ出て年首の賀儀を演舞の口誼竟りけは正直と
 貌と改ぬ今日来る緯另美非む持永管領小密訴や去けん室町殿の御誼とて
 遊佐の城へ在下と指さ箇様く道まうとて就盛が傳へ旨を脱漏るく説出
 きて既の任る上うら在下とも脱るる路さく再遍這首の来まるの和女郎が

胸中と本直せうのねど是の止緯と得ざる之這上の理と非の曲と御誼の従ひ
 なる嗟峨の坐を上皇の恩勅とあるく父祖の對して遺訓の突るとものへづ
 らど若又和女郎が猶悟らどて強て推辞て従へば違勅違誼の罪とせられて不測の
 禍害與るべし憐れ正直が身上の安危も開首の量難く然る和女郎が與而已
 らど在下一家を助ると想ひて御稟せらるべしと他の人又自う人も拿交へつ
 諭し負る語と听て姑摩姫の想ひを佛然とせし色を稍咳嗽の紛らして肚裏の
 惟ふをさて持永のさるる満家就盛商量して叔父を嚇して前憾を尚も
 遂んとするふことを想ひ此とも愧ららど面を端して静の道中想ひ係なく
 妾が久と室町將軍のさるる嗟峨の坐を太上皇と大御心の懸させのひて
 叔父君の令て持永と婚姻を勧めらるる最も恐惶き辱さるる身は餘り
 たは快御稟と稟をさるる聊存る仔細もは是非及び固辞なるゆ



女大車馬五甲巻一

九

五甲巻二



女大車馬五甲巻一

五甲巻二

這旨を以て然るべく仰上らる賜つるべし。任地違勅違詔の罪と甚麽様の令
 屬らつとも是非及ばざる次第は、辞を乞ふ所もなかりと、辨も無げの道
 放て正直の喘息と衝き要時困して忙然たりと、惟回して又いさる。その道
 辨も、普通の道辞といふべきのも然らざりぬ。稟上が、和女郎の公界の形勢を
 知れば、恁一昧地のいふらうらど如此嚴重なる勅詔御説と、陳ぐる道理もな
 情の任せ固辞をとり、稟上へさうも、和女郎が恁も道んく在下の原
 是知、這媒妁の一向の推辞さう、成就盛へ箇様、小道さう然るべ、恁の
 解説もなかり、恁で回去るべき克想も、看らるべし。以前南北両朝と立、另れ
 御响らるる辨も有へ、且ど既におん和議整正して、太上皇今上の御父君と御坐
 其政令を主宰する、室町殿の命を、和女郎一己の了箇、然無愛、稟難う
 曲て承允せざる、三方四方平穩の辨、済むべきもの、且、再三再四尋思と、えられ

いと諄々、いと姑摩姫、莞尔と笑ひ淡き女児、公界の辨、知らるる。と、さ
 うの事、を、理義を辨へ、之、最初より仔細と稟て推辞ひ、難くも、な
 さい、女児の人悪氣、議論、且、且、亦至尊の恩、命、對、なり、之、言、の、過、え
 恐惶も、いと、特地稟さ、ひ、い、り、さ、さ、も、然、ら、ざ、り、小、宣、つ、仔、細、と、述、ぶ、辨、を、述、ぶ
 叔父君の、おん前、最も無礼、く、い、ども、意、を、静、め、所、の、人、抑、今、番、婚、姻、の、一、条、と、
 太上天皇の、恩、教、と、稟、さ、う、り、妾、の、一、切、意、得、回、し、開、の、唯、う、も、首、の、う、り、任、爾、太、上
 皇、父、祖、三、世、の、忠、功、を、思、看、も、何、と、當、今、嵯、峨、へ、御、隱、避、の、う、り、あ、て、南、朝、忠、臣、の、後、と、立
 の、の、を、室、町、家、へ、仰、出、さ、る、べ、し、や、除、非、又、仰、出、さ、る、べ、し、と、も、我、持、決、し、て、從、つ、る、べ、し
 ら、ぞ、開、故、如、何、と、推、て、も、首、の、人、往、明、徳、中、御、和、親、の、响、き、も、折、言、書、の、載、り、と、い、う、
 御、兩、統、交、互、御、代、と、知、食、へ、き、御、契、約、を、義、持、拒、も、と、て、今、小、立、太、子、の、おん、御、代、
 う、き、小、江、湖、上、の、風、聞、ぬ、伏、見、宮、と、取、立、て、宝、位、と、讓、せ、ぬ、人、ら、う、近、き、有、り、と、

稟をうると大虚説り知むれば太上皇の勅命を聊の事もせず辞せらるる義持の
 意なるは是等の重き御契約を打も措むて快く料理つる言該ある小开を
 除て女子一個が智烟の緯を左や右や提擲るを心得ぬまは是れ小仔細の必
 りるべきものなり。任地を左まれば右のものも假も勅諭とあるうへ賤微き身にて對
 捍して所志をいへくはならねども开の緯がらふこそ依り今ももの御受禪の御誓約の
 違ひる上皇必御憤りて舊好の輩を召さるひららん欲當下妾室町殿の家
 隸する畠山持永が妻とらむ。怎まの向て即標と立ん父祖の遺訓の乖きてる千悔の
 其益多く亂離の人とらむ。而已蓋先代のおん胸の肩を比べ足利家の家臣が
 妻あるらん事へ好くも付らねど御前約毫も錯をて小倉宮の大御代と成る
 緯のらん开時火時と勢ひと小因て只廢家系とのべくもあらざ補畠山の怨讎言
 畢竟忠義の興り死との和解も开首小具らん欲這今あして譏を言ふ非ど

當時のさあふて楠家の舊忠を賞せんとんとらふ甲斐多き女子を立らむととも
 叔父君正しく坐せ、畠山が河内の守護と召放さして叔父君小一圓の賜ふべき小六
 らくして叔父君の結夕采地を削らむ。更ぬ奴家の畠山が所領を分ちて當郡の内
 小て僅の地と賜へんと御説も覺えむ。さて又禮記の文を據て我父没しぬへ上叔
 父君と父とと其命を听て嫁せむ。つるも奴家の意得難くゆ。稟を大憚りするひら祖
 父頭殿左馬頭足利氏正殿の降参のひらひら太力折を勢究り。故のまも非ど深き御慮
 おいける御事と兼と正一切を遂めて病て薨るる。那周公が恐懼の日王奉謙
 譲りける時死とのひら白居易が語の等しく成果て家の汚名を削りか。是故を以て
 伯父正勝も父も忠義の二字の想代て父の弓曳き及を交て互に絶交せられ。先身の
 當時人質として北山殿の傍近く召使するひら。這頭の情由と知むる在る。
 竟小足利家の昵近と做と嫌忌に在る。然る故小今正しく親族の間せられども。

猶疎々々つるを過し頃室町にて得難き命と助らざる。其時より身と隷と萬
 事後見と憑たき由義持のいそぎをば。御前約の絆の十分は遂ぎせぬ間も。當時
 天下の権柄と執票さう將軍家の。太上皇の恩勅といそぎ。終ふ前義を棄て。屈て和議
 必賢びん。信は這を御受禪の。絆まひ迄に設意さうとも。おん身の猶子おせんと
 絆へ御免を被るく想ひは。是私のふ非だ。父祖尊靈の御遺訓されば。おん身と侮
 るとみ聞き。次ふ去妹強盗們が夜稠の駒不給失せ。當家の重寶錦の御旗菊水
 の旗已下の物と。婿引出せんと。満家のさうら。天下の政刑と司を。理非とけす
 べき管領の詞ともおやえ。奇怪。那夜艾強人が。件の東西と盗と出して。拿去さうの
 分明。當家の重宝小究らば。急小返賜ふべき。さうら。一言の穿鑿も及
 び。開伏中。没収らさう。是怎る道理。縦計那御旗。疑似ゆとも。開縁故
 と明ふ。此方へ告て。道理さう。没官せらう。絆も有ん。折さう。断もさう。徒小室町家。おら

管領家ふる識と。藏。措て月と経る。沙汰さう。今更小拿出て。管領の
 目錄。載んとあつて。傍痛さう。只一遍の穿鑿も。縁由と藏主へ告らさう。ハ
 那御旗の尊と。絆ハ一箇の贖物。開贖物と以て。更小藏主へ佳禮の信。小音
 物。おせらさう。沙汰と限。管領の料理。道と。法度ハ一箇の與小曲
 ぬ。君自ら敗。志地。民と治。義持も。听識さう。管領の稟。さうら。
 下賜。君自ら。法度と敗。比類。おん。説。著。那御旗。當
 家相傳の重宝。身。家。換。可。惜。際。限。然。有
 として。道の。終。這。身。受。べき。所謂。は。只。盜。賊。が。掠。奪。を。室。町。殿。の。更。奪。ひ。て。
 拿。躰。さ。う。る。東。西。と。せん。の。争。り。重。宝。欲。さ。う。と。て。開。故。と。以。て。身。と。織。し。名。を。腐
 ぶ。べき。事。の。お。ん。這。等。の。由。と。脱。も。さう。回。と。復。命。も。強。て。勸。め。さう。前。番
 も。既。小。稟。さう。如。く。おん。眼。前。て。頭。髻。と。截。尼。法。師。小。成。さう。然。も。猶。許。され。さう。又

予もてきき。よき。まじみ。と。言。語。撓。ま。烈。女。の。辨。論。舌。疾。う。と。遅。う。
 小伏て父祖の君へ黄泉まで分解し侍へ。と言語撓ま烈女の辨論舌疾うと遅う
 ぞ。寛。氣。と。含。み。て。演。々。と。正。直。理。義。は。通。ら。と。て。默。然。と。姑。且。の。語。を。閑。て。居。う。ら。
 慚。愧。う。頭。を。や。や。拾。げ。和。女。の。一。所。も。其。理。あ。と。今。と。成。て。既。ぶ。と。在。下。も。父。
 祖。三。代。の。忠。勤。を。想。は。ぬ。小。あ。ら。れ。ど。も。故。頭。殿。北。朝。へ。一。旦。降。り。あ。ひ。一。晌。在。下。へ。未。切。弱。
 る。一。と。質。と。して。室。町。殿。へ。参。せ。ら。と。と。る。故。と。以。て。詳。き。俸。へ。知。ぎ。と。と。室。町。殿。在。
 下。と。他。事。あ。く。召。使。を。一。く。在。下。も。亦。異。心。を。存。せ。と。年。来。忠。を。盡。さんと。想。へ。と。然。
 る。小。鹿。苑。院。殿。薨。逝。の。事。御。座。の。頭。小。奇。異。が。征。矢。あり。开。か。り。寛。氣。を。復。と。由。和。
 歌。と。彫。う。と。と。在。下。の。者。う。俸。さ。ら。と。と。那。御。座。邊。の。外。様。的。の。入。べき。ゆ。非。と。
 へ。彼。安。密。小。穿。鑿。ゆ。り。小。南。朝。の。餘。孽。さ。と。と。先。在。下。と。忌。嫌。と。終。是。當。將。軍。
 家。の。御。前。と。遠。放。ら。と。と。う。小。米。地。と。之。削。ら。と。と。さ。と。と。照。据。さ。と。と。の。さ。と。
 御。狐。疑。も。解。う。ら。と。と。し。嚮。小。和。女。即。と。赦。免。の。响。在。下。と。も。免。許。あり。と。加。恩。の。地。と。も。

賜。ひ。と。と。左。右。の。御。恩。と。受。載。ま。と。忠。義。と。盡。さん。の。と。思。へ。と。然。と。と。和。女。即。小。三。と。
 と。も。辞。と。と。き。の。ゆ。り。ゆ。り。と。太。上。天。皇。の。勅。詔。と。固。辞。奉。る。程。さ。と。と。嚮。小。室。町。殿。
 小。一。と。二。千。金。と。賜。ひ。も。全。足。利。家。の。吹。拳。さ。と。と。开。と。と。辞。せ。び。貶。と。と。今。番。婚。姻。の。
 一。条。と。と。志。う。強。固。く。辞。奉。る。と。道。せ。も。果。と。と。姑。摩。子。姫。の。容。貌。と。位。と。改。め。と。开。の。
 曰。す。と。と。那。响。の。二。千。金。の。艸。々。も。あ。と。と。室。町。殿。と。刺。へ。と。と。う。志。と。忠。孝。と。と。
 て。慰。ま。せ。と。と。の。一。勅。命。さ。と。と。父。祖。の。忠。義。と。奴。家。が。孤。獨。と。恵。ま。せ。と。と。と。あり。
 故。と。以。て。道。う。道。う。拜。領。し。と。今。番。一。开。と。と。一。等。と。と。と。御。誓。言。の。御。受。禪。と。
 近。き。あ。と。と。の。ゆ。り。と。と。俸。の。黒。白。も。定。ら。ぬ。と。と。父。祖。累。代。の。怨。敵。と。と。自。由。山。と。と。と。
 結。と。と。仰。ら。と。と。院。宣。の。憚。ら。と。と。小。僻。事。款。除。非。兩。朝。の。義。ゆ。と。と。と。も。君。小。大。ト。
 き。と。と。小。僻。事。の。御。坐。ま。と。と。几。番。も。念。直。さ。と。と。と。と。御。諷。諫。と。も。稟。上。げ。と。と。と。
 枕。聞。食。容。ら。と。と。と。死。と。以。て。争。ひ。さ。と。と。と。忠。臣。の。道。と。と。お。が。さ。と。と。と。況。や。恠。る。と。と。と。

企の君の御本意をうごころのど。室町殿は他人の忠義を。押して画餅を倣せらる。欲是
 亦人君の道とあらねば。所詮氷炭薰蕕の差別も。強取の院宣御説と宣と
 も。上の御與も宜く。父祖の志を。倣小従ひ。非と。這義を。尋念し。其
 う。と念慮の随ひ。言懲せ。正直再遍説。べき。黄蘗と。唾。啞児の。般く。
 頸を。坐して。惘然と。困。果て。居。這回。枕も。淳長。と。楮。数。定限。の。と
 ば。巻。と。換。て。次。下。の。回。第。四。三。回。の。首。小。分。解。と。者。て。識。べ。い。



開卷驚奇俠客傳第五集卷之一終

借

馬鹿の家

治助大金玉

